

称号及び氏名	博士（人間科学）	林 雪云
学位授与の日付	平成25年3月31日	
論文名	北宋の文学者梅堯臣・曾鞏・蘇軾の妻に対する観念	
論文審査委員	主査	大平 桂一
	副査	大形 徹
	副査	河野 道房
	副査	中原 健二（仏教大学大学院文学研究科 教授）

論 文 要 旨

本論文は北宋の代表的詩人である梅堯臣、曾鞏、蘇軾がその妻、妾について書いた詩詞、墓誌銘などを中心として取り上げ、その妻に対する観念を考察、分析し、北宋における士大夫たちの妻妾観の一端を明らかにするとともに、宋代文人特有の生活態度や価値観について考究するものである。

以上のことを考察するにあたり、本論文は以下のように構成になっている。

第一章の序論では、本研究の背景と目的、研究の方法と資料、先行研究、論文構成を説明した。以下の構成は、第二章から第五章が本論、第六章が結語、残された問題の所在と今後の課題となっている。

第二章の「梅堯臣の悼亡詩について」では、北宋の著名な詩人である梅堯臣の悼亡詩を取り上げた。梅堯臣には数多くの悼亡詩がある。その数はきわめて多いと言えるのだが、彼の悼亡詩がまとまって取り上げられることはこれまで少なかった。本章の目的のひとつは、梅堯臣の悼亡詩の具体的な分析を通して、その特徴を明らかにすることにある。梅堯臣の悼亡詩は、まず「平易なことばによる感情表現」と「日常の瑣事への注視」を特徴とするが、これは梅堯臣の詩全般、さらには彼を開祖とする宋詩の特徴に通じるものである。次いで挙げられる特徴は、「物を媒介にした今昔の対比」であり、また「夢の詩」が非常に多いこともその特徴のひとつである。そして、「悼亡の自悼への転化」、つまり妻の死への哀悼が、彼みずからの官僚としての身世の感に密接につながっている点を、それを特徴の5番目に挙げるができると思う。こうした特徴からは、彼の豊かでこまやかな感情と亡き妻への誠実な思いを感じ取ることができる。梅堯臣の悼亡詩は、読む者に生と死の衝突を感じさせる。彼はみずからの「生」を妻の「死」と対比させて、その苦痛とやり場のない悲しみを深く印象付ける。そしてそこからは、官僚としての進取の気象の急激な衰えと隠遁を思う暗澹とした思いが垣間見れるのである。

また、前代の著名な悼亡詩の作者、すなわち晋の潘岳、中唐の韋応物と元稹、さらには晩唐の李商隱の作品と梅堯臣の作品とを比較検討することも本章の目的のひとつである。彼らは境遇も異なるし、生きた時代も同じではないが、その悼亡詩は基本的には同じ特色を持つと言ってよいだろう。したがって、作品の比較検討に重点を置くのは、梅堯臣が

「悼亡」というテーマをどのように継承し、また、そこにどのような新しい創意を加えたか、また、伝統的な表現のモードの基礎に立ってどのような視点を開拓したのかを探るためである。さらに、梅堯臣の悼亡詩の独創と思われる一面、とくに結婚生活における女性の価値と地位に対する新しいとらえ方に注目し、梅堯臣の作品の悼亡詩の歴史上の位置について分析している。

第三章の「梅堯臣の詠妻詩とその妻に対する観念」においては、前回の論考である「梅堯臣の悼亡詩について」に引き続き、梅堯臣の詠妻詩を対象として、彼の妻に対する観念を分析したものである。梅堯臣は新傾向の宋詩の創始者と目される詩人であり、彼の詠妻詩は独特な風格に満ちている。梅堯臣の妻に対する描写には、前代の詩人を超越した個性的な女性観が表現されている。彼は作詩の過程で、ある時期における妻の生活の断片、思想、情感、心理状態を理性的に観察し、女性の中に独自の価値観を見出した。梅堯臣の詠妻詩は、(一) 女性に対する観察が一貫性を持っていること、(二) 妻に対する評価が非常に平等公正であること、の二点に要約される。梅堯臣の妻に対する一貫した描写と、妻を観察する独自の視点を手掛かりに、梅堯臣の妻を詠じた作品群及び妻の墓誌銘（作者は欧陽修であるが、行状その他の材料を提供したのは明らかに梅堯臣であるので、彼の関与は否定できない）に分析を加え、梅堯臣の女性観の形成過程を検討している。これらの作品群を正確に評価検討することは、梅堯臣の人となりや作品の理解に資するだけでなく、士大夫が家庭生活を重視したとされる宋代文化を理解する上でも重要であると考えられる。

第四章の「曾鞏の妻に対する観念—女性墓誌銘を中心として」では、宋の代表的散文作家の一人である曾鞏の妻に対する観念を、彼の著した女性墓誌銘を中心として考察したものである。第三章の「梅堯臣の詠妻詩とその妻に対する観念」に引き続き、宋代の女性観の変容という大きな流れのもとで、曾鞏の作品の内容を対象として分析し、同時に梅堯臣の詩を比較材料として考察している。中国文学界では、曾鞏の宗法思想、文学作品、文学理論については、犀利な研究が行われてきたが、彼の女性観に対する研究は殆んど行われてこなかった。このことに鑑み、本章においては曾鞏が書いた女性の墓誌銘を丁寧に読み、彼の視野にとらえられた女性の日常生活、及び曾鞏の描く理想の妻像を探究した。まず、墓誌銘という文学ジャンルが、故人の事績を紹介し賛美するという形式の文章であることを確認したうえで、女性の墓誌銘がいつ頃から書かれはじめ、また、それがどのような内容であったかについて趙翼の『陔餘叢考』と嚴可均の『全上古三代先秦兩漢魏晉南北朝文』を材料に考察した。そしてこのような制約のある墓誌銘の文章の中に、曾鞏の哲学や思想を見いだそうと試みた。曾鞏が書いた女性墓誌銘は、ある種常套的なものであったが、彼の墓誌銘を細かく読むことにより、曾鞏の抱いていた理想の妻像を明確に把握することができた。曾鞏の女性墓誌銘における妻のイメージとしては次の点が挙げられる。一、婦道を尽くす妻。二、夫に従う妻。三、夫を助ける妻。ここまでは伝統的な観念の継承であろうが、四、才能あふれる妻という特徴がある。博覧強記の妻、詩を七百首も残した妻、古今の書物に通じ子弟を教育した妻、このような妻のイメージから、曾鞏は規範的な女性を称賛するとともに、「古代の聖王の意に沿うという前提の下」、儒家の伝統的な女性像に対し若干の訂正を試みた事実を観察することができる。本論ではさらに、曾鞏が理想的な妻像を提唱している文章「内治」を取り上げて分析した。曾鞏の理想とは裏腹に、宋代の妻たちが、理想とはかけ離れて、結婚前から贅沢な生活を楽しみ、結婚後は実家の権勢をかさにきて夫を自分に従わせ、舅姑にずけずけものを言い、夫の親族をないがしろにする現実があったことを指摘した。理想と現実の乖離に曾鞏は気づき、きちんと向き合っていたのである。この「内治」こそ曾鞏を北宋の士大夫の中で特異な存在にしている文章であ

り、本章では、「内治」を詳細に分析し、その意義を証明した。最後に曾鞏の妻像を検討すると同時に、同時代の文人梅堯臣の妻像と大まかな比較を行った。

第五章の「蘇軾の妻妾に対する観念」では、北宋の文学者、官僚、思想家であった蘇軾が妻妾のために書いた詩・詞、及び墓誌銘を始めとする散文を分析することにより、彼の妻妾に対する愛情の性質、結婚観を探究し、彼の妻妾に対する観念を分析した。蘇軾は、詩・詞・散文ひいては絵画・書法に秀でていただけでなく、欧陽修・梅堯臣の後を承けた北宋文壇の指導者であった。彼の作品は当時の社会や時代精神を広くそして鮮明に映し出しており、中国文学研究者の関心を集めてきた。ただ、蘇軾の文学表現の手法や、禪の思想などについては、すでに多数の論考が発表されているが、蘇軾の妻妾に対する観念について論及した研究者は多いとは言えないであろう。蘇軾は六十五年の生涯に於いて、二人の正妻と、数人の妾を持ったが、本章では二人の正妻である王弗、王閏之、そして妾の代表としての朝雲の三人を取り上げる。彼女たちは三人とも蘇軾に先立って亡くなったため、蘇軾は彼女たちの墓誌銘をすべて自分の手で書いている。蘇軾が妻妾を描いた詩文の特徴としては次の四点が挙げられる。一、妻妾の情感を尊重し、才智を称え、彼女たちの人間としての存在価値を肯定した。二、詩と並び宋代に流行した文学ジャンルであった詞において、妻妾の美貌を堂々と讃えた。三、妻妾の高潔な人格を称賛し、彼女たちに対する敬意を表明した。四、彼の深い仏教信仰の反映として、たびたび亡き妻妾たちの法事を行い、冥福を祈る文章を何篇も書いた。これも他の文学者たちと大きく異なる点である。このような傾向は最初の妻王閏之の死以後にあらわれてくるが、特に晩年、惠州に流されてから顕著になっていくことを実証した。妾の朝雲は孤独な晩年を流謫の地で迎えた蘇軾が唯一たよりにした女性であったため、その死を悼むにあたって、仏教信仰は大きなよりどころになったのである。

蘇軾は妻妾たちの生活、思想、情感の描写を通じて、その理想の女性像を造形し、また同時に北宋士大夫の妻妾に対する独特の観念と価値観を表現したのであった。さらに蘇軾の妻妾観と梅堯臣と曾鞏の妻に対する観念とを比較検討することも本章の目的のひとつである。彼らが生きたのはほぼ同時代であるが、その妻に対する観念がどのような特色を持っているか分析している。蘇軾の妻妾観は二人の先達のどのような点を継承し、またどのような新しい創造を付け加えたのかを探っている。

このように北宋の代表的な知識人である梅堯臣・曾鞏・蘇軾は詩文の中で、亡き妻を描き出し、妻の婦徳を口を極めて称賛している。妻は賢明で、慈悲深く、道義に厚く、言行はすべて女性としての規範に合致していなければならない、この点は同時代の文人共通の観点である。彼らは妻となった女性が才華に富んだ女性であることを強く望み、日常生活で自分の役柄をきちんと演じ切るよう期待したのであったのである。彼らは妻妾を詠じた作品を創作する過程で、現実生活の基礎に立ち、理想の妻のイメージを構築していると考えられる。

今後、より幅広く、士大夫達の女性を詠じた作品を取り上げ分析して、北宋の士大夫の妻に対する観念を全面的に把握する必要があると考えている。

学位論文審査結果の要旨

学位論文題目 「北宋の文学者梅堯臣・曾鞏・蘇軾の妻に対する観念」 について、本審査委員会は、人間社会学研究科人間科学専攻の博士論文審査基準に照らして厳正な審査を行い、以下のように評価するという結論に至った。

(1) 研究テーマが絞り込まれている。

本論文の研究テーマは北宋の文学者梅堯臣・曾鞏・蘇軾の妻に対する観念である。このテーマはこれまで概論的に取り上げられたことはあったが、少数の文学者にしぼった悉皆調査的な論考は存在してこなかった。本論文が初めて本格的にこのテーマを論じたといえる。第二章の「梅堯臣の悼亡詩について」では、北宋の著名な詩人である梅堯臣の悼亡詩を取り上げ、梅堯臣の亡き妻を追悼した詩をテーマにしている。第三章の「梅堯臣の詠妻詩とその妻に対する観念」では悼亡詩以外の作品から梅堯臣の妻に対する観念を考察している。第四章「曾鞏の妻に対する観念—女性墓誌銘を中心として」では曾鞏の女性について書かれた墓誌銘を主な題材として曾鞏の妻に対する観念を考究している。第五章の「蘇軾の妻妾に対する観念」では蘇軾の詩・詞・散文を手掛かりとして蘇軾の妻妾に対する観念を追究している。この三人は科挙試験の試験官と門生でもあり、この三人を定点観測の対象として北宋の士大夫の妻に対する観念を探求しようとしており、テーマはよく絞り込まれていると評価できる。

(2) 論文の方法論が明確である。

本論文の方法論は、梅堯臣・曾鞏・蘇軾の妻に関する詩・詞・散文を正確にそして詳細に解説し、そこから彼らの妻に対する観念を帰納していくというものである。第二章で悼亡詩を論じた個所では歴代の悼亡詩の中に梅堯臣の作品をきちんと位置付け、また第三章では梅堯臣の妻の墓誌銘に現れたエピソードに対して、『世説新語』の賢媛篇を引用しその価値観を探るなど、随所に歴史的な視点を導入して彼らの妻に対する観念を客観的に評価しており、当該論文の方法論は明確であると評価できる。

(3) 研究テーマについての先行研究の調査を十分に行っている。

このテーマの論文の先駆けは中原健二教授の「詩人と妻—中唐士大夫意識の一断面」(『中国文学報』第四十七冊 京都大学文学部中国語学中国文学研究室内 一九九三年十月刊)と「夫と妻のあいだ—宋代文人の場合—」(『中華文人の生活』一九九四年一月十九日刊)である。林氏はこの2篇の論文を熟読し、その基本的な方法論を会得すると同時に、それ以降に発表された論考を丹念に蒐集し、その基礎に立って着実に研究を行っており先行研究の調査を十分に行っていると評価できる。

(4) 研究の素材となる基本文献、資料、調査データを十分に吟味している。

基本文献としては、梅堯臣に関しては『梅堯臣集編年校注』、曾鞏に関しては『曾鞏集』、蘇軾に関しては『蘇軾全集校注』などの校訂の行き届いた資料を使っている。そのほか引用をする際には、出典は原典を当たり、さらに最善のテキストを用いている。また女性の墓誌銘の文献上の起源を探究するに当たっては『全上古三代先秦两汉魏晋南北朝文』を通覧するなど、多大な努力を行って必要な資料を蒐集した。よって研究の素材となる基

本文献、資料、調査データを十分に吟味していると評価できる。

(5) 研究テーマについて、先行研究にはない新しい知見を打ち出している。

第二章では、梅堯臣の悼亡詩が、妻の追悼から自悼への変化という大きな特徴を持っていることを実証し、魏の潘岳、唐の韋応物と元稹ら歴代の悼亡詩の中に梅堯臣の作品をきちんと位置付けた。「妻の追悼から自悼への変化」という指摘は林氏の優れた創見の一つである。第三章では、第二章に続き、日常生活において妻を詠じた「詠妻詩」における妻のイメージを分析し、(一) 女性に対する観察が一貫性を持っていること、(二) 妻に対する評価が非常に平等公正である、という特徴を見出した。また、梅堯臣が材料のすべてを提供し友人の欧陽修に依頼して書いてもらった亡妻の墓誌銘を分析するとともに、当時の社会的背景、彼の経歴を手掛かりとしてその女性観の形成過程をたどった。第四章では、保守的な思想家として知られてきた曾鞏の女性の墓誌銘を丁寧に読み、曾鞏が夫に従う妻、夫を助ける妻、という伝統的なイメージに加えて、才能にあふれる妻を積極的に描いたことを実証した。また曾鞏が理想の妻像を提唱した文章「内治」が、実は当時の理想からかけ離れた現実を反映した作品であることを、「内治」に対する詳細な分析から実証し、その意義を解明した。これまで曾鞏の文業・思想についての本格的な論文がほとんど無かった中、この章が書かれた意義は大きい。第五章では、蘇軾が彼の二人の妻、一人の側室を題材とした数多くの詩・詞・散文を分析し、蘇軾が妻妾の情感を尊重し、才智を称え、彼女たちの人間としての存在価値を肯定していたこと、妻妾たちを追悼した文章には彼の仏教信仰が色濃く反映されていたこと、などを始めとする諸特徴を見出した。これらの知見はこれまでの論考には見られなかったものであり、それらの持つ意味は大きいと評価できる。

(6) その知見を裏付けるための、必要にして十分な議論と実証が展開されている。

本論文は、新奇な方法論を駆使したものではなく、例えば新発見の欧陽修の書簡とあった、世にも稀なテキストを使用したものでもない。存在はよく知られているながら従来の文学研究では取り上げられなかった作品を詳細に読み込んだ論考である。各章の末尾には「小結」が設けられ、簡明にその章の内容がまとめられた上で、次章に進む構成になっている。(5) に於いて指摘した新しい知見には、裏付けとなる十分な資料と考察がきちんと対応し、記述は非常に穏当で破綻がない。以上のことから、必要にして十分な議論と実証が展開されていると判断する。

(7) 当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文である。

すでに指摘したように、このテーマはこれまで取り上げられたことはあったが、概論的なもの、断片的な研究にとどまっていた。少数の文学者にしぼった悉皆調査的な論考は存在しなかった。梅堯臣・曾鞏・蘇軾の妻に対する観念をテーマにした本論文は、以降の北宋士大夫の妻に対する観念研究の水準器ともなる存在である。本論文が北宋、南宋の士大夫の妻に対する観念の研究の出発点となることは疑いなく、当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文であると評価する。

以上のような評価を踏まえて、本審査委員会は本論文を博士(人間科学)の学位に値するものと判断する。